



Title	浅茅が宿の恋：先行文芸との比較を中心に
Author(s)	松原, 秀江
Citation	語文. 1995, 62-63, p. 15-24
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68867
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

浅茅が宿の恋

— 先行文芸との比較を中心に —

松 原 秀 江

一

『雨月物語』巻之二の「浅茅が宿」は、次のように始まっている。下総の国葛飾郡真間の郷に、勝四郎といふ男ありけり。祖父より旧しくこゝに住（み）、田畠あまた主づきて家豊に暮しけるが、生長て物にかゝはらぬ性より、農作をうたてき物に厭ひけるまゝに、はた家貧しくなりけり。

と。この物語には多くの原拠があり、それらは既に指摘されている⁽¹⁾が、

物にかゝはらぬ性

と、開巻早々紹介される勝四郎の性格は、原拠になった他の作品に異り、

家賃鉅万にして、

と勝四郎によく似た環境の中で紹介される『愛卿伝』の趙子にもない、この物語に独得のものである。しかもこの勝四郎の性格が、先行作品に拠りながらも、それらとは異なる『浅茅が宿』という一篇の物語を作り上げている、と云つてよいだろうか。

というのも、この性格ゆえにこそ、勝四郎は先ず、父祖伝来の家

を傾け、「親族」に蔑視されるや、無分別にも「残る田」畠を売り払い、それまで経験したこともない、絹交易に手を出してしまうからである。そして「心のはや」るままに、妻宮木の「諫めや」「心ぼそ」さにも耳をかさず、都へ上り、「此の秋」には帰ると約束しながら、戦乱に巻き込まれて、盗賊にまで出会うと、

家も兵火にや亡びなん。妻も世に生てあらじ。しからは古郷^{ふるさと}とても鬼のすむ所なり

と決め込んで、「又京^{みやぎ}に引きかへ」してしまうのである。

「勝四郎の故郷への道をふさいだのは戦争であつた」という意見がある。そしてそのような意見は、この作品を、「乱世戦国という闇の時代に生きる庶民の運命」を描いたものだ、という考え方にもつながっていくように思われる。⁽³⁾

だが、享徳四年の乱に引き続き、寛正二年、今度は応仁の大乱へと発展するような戦乱が起り、伝染病も蔓延して、この世も終りかと思われる騒動のまつた中で、勝四郎も、

いつまで生きべき命なるぞ。

と思ひ、

古郷^{ふるさと}に捨てし人の消息をだにしらずで、萱草^{わづれぐさ}おひぬる野方^{のへ}に長々

しき年月を過しけるは、信なき己が心なりける物を。たとへ泉下の人となりて、ありつる世にはあらずとも、其のあとをともめて壙をも築べけれ

と決意した時、彼はわずか「十月あまり」の日数で、たちまち「古郷に帰り着」いているのである。とすれば、宮木のもとに帰りつけるかどうかは、勝四郎自身の「心」次第だった、と云ってよいだらう。

二

しかもそれだけではない。鎌倉公方足利成氏が、その第一の補佐役であるはずの管領の上杉憲忠を殺害して、享徳四年、幕府が上杉氏を援け、幕府の管領だった成氏が総州下河辺に逃れるという戦乱の起ったことについて、作者秋成が、

関の東忽(ち)に乱れて、心くくの世の中となりしほどに、と記していることに、注目してみよう。傍点部分の「混乱状態になった人心」を、今少し詳しく見るなら、高田衛氏が、『雨月物語評解』であげた次の用例が、適当だろうか。

主親ともいわず、妻児ともうつしまず、浅ましう奪ひ争ふには、人一人として頼まるる心なく、ましてゐなかのはてはての国には貌狼のいどみのみにて

これは、『ぬば玉の巻』の一節だが、親子にも等しいはずの主従の間で、相争うこの戦乱の主謀者達の心の様が、戦乱に巻き込まれた人同様に、「心くく」であること、云うまでもない。そしてまた、勝四郎も宮木も、一つ屋根の下に暮す夫婦でありながら、その心は夫々に「心くく」なのである。それは、この物語の原拠の一つと

される『愛卿伝』に比べても、明らかだろう。『愛卿伝』の趙子は、「大都」の「吏部尚書」に誘われ、「功名」も夢ではないと、胸を躍らせながら、残して行かなければならない母や妻の悲しみを恐れて、決心できず、愛卿はまた、自分たちへの愛よりも、「男子」は「功名」を取ることをすすめて、二人は向い合い、一つになろうとしている。宮木も勿論、かい／＼しく旅支度をととのえ、夫の心に添おうと努めてはいる。だが、勝四郎は、軽卒な行爲を謀め、独り残される女の「野にも山にも惑うばかり」の心細さを訴える宮木の心も無視して、はやる心のままに、そそくさと都へ旅立ってしまうのである。『古今集』巻八の、

命だに心にかなふものならばなにか別れのかなしからましの歌をふまえて、

命だにとは思ふものゝ、明をたのまれぬ世のことわりは、武き御心にもあはれみ給へ

と訴える宮木の言葉の中の「武き御心」は、勿論、夫以外には頼る者もない、「稚」くはかない女の一途な心も理解しえない、勝四郎に向けられたものではある。だが、それはまた、戦乱を引き起こした人の心や、「世の中の騒がし」さに紛れて、宮木に言い寄る「恐し」い「人の心」にも通じる言葉だろう。宮木は、

かへるは此の秋なるべし。

と自らこともなげに約束しながら、「秋」になっても帰らない勝四郎の心をはかりかねて、

世とゝもに憑みなき人心かなと恨み、悲しんでいるのである。

とすれば、「勝四郎の故郷への道をふさいだ」かのように見えた

戦乱も、勝四郎の心の中に、あるいはその延長線上に、おのづからあったのだ、と云わねばならない。

三

ところで、勝四郎が約束を守らず、七年もの年月を夢のように異郷で過ごしてしまうのは、その「揉ざるに直き志」、即ち「一本気でまっくずな気性」が、人々に愛されたからだだった。勝四郎は、豊かな家に生まれてのんびり育ち、「農作」にも精を出さず、家が没落するや、家運の挽回を願って、「足利染の絹の交易」に目をつけると、たちまち「残る田」も「販つくして」「絹素」を買い込み、「心のはや」るままに、都へと旅立つてしまう。そして享徳の乱が起り、古郷が戦場になったと聞くや、「心も心ならず、八月のはじめに」は都を出、とにかく約束した「此秋」のうちに、宮木のもとに帰りつこうとするのである。盗賊に一切を奪われ、病いにとりつかれた勝四郎を、雀部の妻の実家の者が、「見捨てず」に「いたは」るのも、「苦にたの」むその一途さに心動かされてのことだったろう。高田氏は、この「児玉氏に救われる所は、前章『菊花の約』の赤穴が左門に助けられる部分に酷似した設定である」と云われている。赤穴は左衛門が、「一生を信義の為」にささげた「信ある武士」であること、云うまでもない。

だが、勝四郎の「ものにかかはらぬ性」は、即ち「揉ざるに直き志」ではなかった。赤穴は左門との「一旦の約をおもんじ」、帰れない状況（それも疑いと利害に支配された戦乱だが）が生じ止め置かれると、

人一日に千里をゆくことあたはず。魂よく一日に千里をもゆく。

と「みづから刃に伏し」、「陰風に乘」ってまでも約束を果たすが、勝四郎は、噂を耳にし便りをするでだてもないままに、宮木は生きていないと軽卒にも思い込んでしまうのである。この勝四郎の性格は、後述する西鶴の『懷硯』や『万の文反古』の女の側の状況を、男と女に二分したもののか、と思われるが、それはともかく、こんな勝四郎の行爲も、豊かな家に気ままに育った男の「ものにかかはらぬ性」の一つの表われ方だったろう。

ところで、宮木は、そんな勝四郎の性格を知らなかったのだろうか。知っていながら、「さりとも」と待ち続けたのだろうか。とすれば、宮木の像はあまりにはかなく頼りなく、彼女を「烈婦」と記す時の「さかし」の意味も「烈」の字面も、十分には生きてこないように思われる。

だが、この物語を、原挽の一つとされる『伊勢物語』二十四段に比べるなら、どうだろう。宮木が勝四郎に再び会いたい、会おうと願うなら、彼女はいつまでも彼を待つしかなかったのだ、と先ずは云わねばならない。『伊勢物語』二十四段の話は、以下のようである。「宮仕へ」の為に出かけた男を、女は「三年」も待っている。それでも帰らないので、熱心に求婚する男に、女が、

今宵あはむ

と約束した所へ、元の男が帰って来た。男が戸を叩いても、女は開けることもできない。

あらたまのとしの三年を待ちわびて今宵こそ新枕すれ
と、女が詠んで贈った歌に、男は「わがせしがごとうるはしみせよ」と答えて、帰ろうとする。悲しみの余りに、女は再び「心は君によりにしものを」と歌に託すが、男は戻ろうとせず、女は男の後

を追いかけて、どうすることもできずに、ついにむなしくなってしまう、と云うのである。

この段を典拠にしたかと云われる『懐視』巻一の一四「案内しつてむかしの寝所」でも、女は男の乗った漁船が難波したと、(勝四郎同様に)思い込み、再婚するつもりになかったにもかかわらず、

親への不孝の第一、是非

とせめたてられて、祝言をあげてしまうのである。そしてその習目、帰って来た男に刺し殺され、後夫は討たれ、元の男も自害している。類似の話は、『万の文反古』巻四の一「南部の人が見たも真言」にも、見ることが出来る。この場合も、男たちは果し合い、女は「行方しれず」になっている。

『懐視』にも『万の文反古』にも、西鶴の咄には、男たちは「遺恨」の者同士だったり、兄弟だったり、女にも親や親類がいて、この世に生きる者の「因果」としか云いようのない複雑な事情があるが、操を守って縊れて死んだ『愛卿伝』の愛卿や、他の女に走った男をひたすら待ち続けて死んだ『今昔物語』巻二十七「人妻死後会旧夫語」の女が、死後も男に会っていることを思えば、その違いは明らかだろう。事情や形はどうあろうと、一度夫を捨てた女が、再び夫に会って契ることはないのである。宮木も待ち続けたからこそ、願い通りに勝四郎に会うことができたのだった。その意味ではいかにも、宮木は賢女、即ち「さかしめ」の一人だったろう。

だが、宮木が夫を待ち続けた理由は、そんなところだけあるのではない。謡曲『砧』の女に比べてみよう。この女は、待ちこがれた夫の言葉も「偽り」だったと、ひたすら夫を恨み、その挙句恨み死にするのである。だが、勝四郎をいつまでも待ち続ける宮木には、

待ち続けなければならぬ理由があった。上京しようとする勝四郎に、宮木は次のように云っているのである。即ち、

かくてはたのみなき女心の、野にも山にも感ふばかり、物うきかぎり^①に侍り。朝に夕べにわすれ給はで、速く帰り給へ。命だにとは思ふもの、明をたのまれぬ世のことわりは、武き御心にもあはれみ給へ。

と。そして勝四郎は次のように答えている。

いかで浮木に乗つもしらぬ国に長居せん。葛のうら葉のかへるは此秋なるべし。心づよく待(ち)給へ。^②

と。この部分について、高田氏は、

その深層に二重三重の寓意、または言葉の多義性がふくまれていて、彼の「帰郷」の不安定さを伝えている。

と云われ、先ず傍線①について、「源氏物語」松風の巻の、いくかへりゆきかふ秋を過ぐすらん浮木にのりて我かへるらんの歌をあげ、

この歌が示唆するのは、幾度かの秋を過して、から帰るといいう「浮木」の性格である。

と指摘されている。また②の部分についても、

この語は「帰る」の序詞であると同時に、「反る」(ことばを裏返る)「うらみ」の序詞でもある。これは、帰る約束が果されないことを示唆する。

と云われている。とすれば、宮木の言葉の深層も、出典があるならそれをふまえて、確認しておかねばならないだろう。

既に記し、また諸注に示すように、宮木の言葉の傍点部分は、『古今集』巻八の次の歌

命だに心にかなふものならば、何か別れの悲しからましをふまえ、「た」よる者もない「女」ながらも、「烈婦」にふさわしい宮木の決意であることを述べている。つまり彼女は、勝四郎に命の限り待っている、約束しているのである。しかもその部分が、次の文章に続いていることを、見逃す訳にはいかないだろう。

此の度勝四郎が商物買て京にゆくといふをうたてきことに思ひ言をつくして諫むれども、常の心のはやりたるにせんかたなく梓弓末のたづきの心ばそきにも、かひがひしく調らへて、其の夜はさがりがたき別れをかたり

この文章の「梓弓」は勿論、「末」の枕詞ではある。だが、それで終りと云うのではない。なぜなら、先述した『伊勢物語』二十四段には、元の男が、今宵新しく男を迎えようとする女に、

あづさ弓ま弓つき弓年を経てわがせしがごとうるはしみせよと詠み贈ると、女はあまりの運命の悪戯に血の涙を流して、我が身をせめ、

あづさ弓引けど引かねどむかしより心は君によりしものをと詠んで、再び男に贈る歌が記されているからである。そしてその黒丸をほどこした部分は、この文章の典拠の一つとして指摘されている『万葉集』巻十二の次の歌、

梓弓末のたづきは知らねども心は君によりしものを
の黒丸部分に、全く同じなのである。のみならず、頼る者もない妻を残して、都へと逃る勝四郎の旅仕度を、「かひがひしく」整える宮木の姿は、「高安」の女のもとに通う男を、恨む様子もなく心よく送り出し、男の身を案じる『伊勢物語』二十三段の哀れにも美しく気高い「筒井筒」の「沖つ白浪」の女を、彷彿とさせるだろう。

とすれば、宮木は、(将来の心変りも含めて)勝四郎の心がどうあろうと、いつまでも変わらず勝四郎を思い続け、留守中の暮しむきや境遇の不安にも耐えて、命の限り勝四郎を待っていると、勝四郎には勿論、われとわが身にも誓ったことになる。そしてその言葉通りに、宮木は勝四郎を待ち続けるのである。

四

だが、命は人の心のままにならず、宮木は生きて再び勝四郎に会うことはなかった。それは先ず何と云っても、勝四郎が、その「物にかゝはらぬ性」のままに、宮木の言葉を十二分に理解しなかったからだ。彼は、人が「心く」になる戦乱の最大の原因でもある「花美を好む節」に恵まれ、思いも寄らぬ利益を上げて、古里に帰ろうとしながら、その戦乱に巻き込まれて賊に会い、すべてをとられてしまうと、

家も兵火にや亡びなん。妻も世に生てあらじ。

と、都に引き返してしまうのである。

だが、再び戦乱に襲われ、誰もがこの世も終りかと、人の世のはかなさを嘆く時、勝四郎も、

かく落魄てなす事もなき身の、何をたのみとて遠き国に返まり、
由縁なき人の恵みをうけて、いつまで生き命なるぞ。古郷に捨てし人の消息をだにしらで、萱草おひぬる野方に長々しき年月を過しけるは、信なき己が心なりける物を。

と己が身を振り返った時、帰郷を決意する。この回心は、既に指摘されているように、「孫ざるに直き志」を愛されて、七年もの間「児玉に身を托」、その志を素直にはぐくんだ結果だった、とも云

えよう。だが、ここで重要なのは、勝四郎が、「いつまで生べき命なるぞ」と、人の世の無常を悟っていることだろう。というのも、この時、

命だにとは思ふものゝ、明をたのまれぬ世のことわりは、武き御心にもあはれみ給へ

と訴えた宮木の心に、勝四郎の心も行き着き、二人は一つになったと思われるからである。宮木と一心同体になった勝四郎は、今度は賊にもあわずたちまちのうちに帰り着く。

だが、既に遅かった。過ぎ去った時間はとり返せない。原抛の一つと云われる『源氏物語』蓬生の巻の色好みの光源氏とは違い、勝四郎が、今は「直き志」のままに、どんなに一途に宮木を思い、「心も心ならず」急ぎに急いで古里に帰ったのだとしても、彼には既に、過ぎ去った時の流れを渡る橋はなかったのである。その昔『万葉集』巻十四に、

足の音せず行かむ駒もが葛師の真間の継ぎ橋止まず通はむと詠まれた「いにしへの継橋も川瀬におち」、宮木の待つ我が家の「松」も、光源氏を待っていた未摘花の宿の松とは異り、「雷に摧れ」て、宮木は既に亡く、尋ねあてた「漆間の翁」は、

吾主何とて遅く帰り給ふ

と勝四郎をせめ、待ちわびて死ぬしかなかった宮木の生前の有様を語るのである。

即ち、勝四郎が都に上ったその夏、宮木が勝四郎に訴えた「たのまれぬ世のことわり」の言葉通りに、はやくも戦乱が起り、若者は兵士にとられ、里人は逃げ去って、豊かだった田畠も「魍魎魍魎の栖所となつてしまったのだった。そんな土地に、宮本は「稚」い

女の身で、「矢武に」つまり「けなげに」も「精いっぱい」、勝四郎を待ち続けたのである。そして約束の秋も去り、あら玉の年を迎えたその年の八月に、精魂つきて亡くなつてしまったのだという。

帰り着いた勝四郎の前に、既に幻の姿を現わしていた宮木の言葉をかけて云えば、頼みにしていた秋もこないうちに、「恐し」「世の中とな」って、「里人は皆家を捨てて海に漂ひ山に隠」ると、たま／＼残った人の心も荒廃して、宮木は、「女の独居を」いいことに、巧みに言い寄られたのだった。が、宮木は、

玉と碎ても瓦の全きにはならはじものを

と『愛卿伝』の愛卿同様に誓いながら、操を守る為に自害した愛卿とも違い、「幾たび」も「辛苦を忍」んで勝四郎を待つのである。だが、相思相愛の男女が会うという七夕の秋がきて、勝四郎は帰らず、「冬を待ち、春を迎えても消息」もない。都へ上って探そうとは思つても、「丈夫さへ有さ」ない「関の鎖」を、女の身では超えることもできず、「軒端の松」を頼りに、「狐・鶴鶴を友として」、勝四郎を待ち続けたのだという。

この時宮木の詠んだ、

身のうさは人しも告じあふ坂の夕つげ鳥よ秋も暮れぬと

の歌が、既に云われているように、『古今集』巻十一の、

あふ坂のゆふつげ鳥もわがごとく人や恋しき音のみ鳴くらむに拠っているのだとしたら、宮木の絶望は、はかり知れない程のものだつたらう。にもかかわらず、宮木はひたすら己への誓いを守つて、「烈婦」の言葉通り、かたくなにも「矢武に」、勝四郎を待ち続ける。「末期の心」を、

さりともと思ふ心にはかられて世にもけふまでいける命か

と、「展^{あき}」なければならぬ程の悲しみをいだいて。

五

だがだからこそ、宮木は、「三年」も待って新しい男を迎え、帰って来た元の男が、

この戸あけたまへ

と、戸を「たた」いても「あけ」ることのできなかった『伊勢物語』二十四段の女とは違い、「聞きし」つた勝四郎の声に、「やがて」即ちすぐに、「戸を明」け、勝四郎を迎え入れることができるのである。そして、つらく悲しく恨めしかった胸のうちを、すべて訴え、

今は長き恨みもはればれとなりぬる事の喜しく侍り。

と再会の喜びを述べている。とすると、これに続く彼女の次の言葉逢を待間に恋ひ死なば、人しらぬ恨みなるべし。

は、どのように考えたらよいのだらう。勝四郎に逢っているのは、宮木の亡霊である。生きて再会できなかったのだから、恨みは永遠に残る、と考えることもできるだらう。だが、果してそうだらうか。

ここで先ず、『今昔物語』巻二十七の「人妻死後会旧夫語」に比べてみよう。この物語の男は、生来の貧乏に耐えきれず、何の不足もない、しかも、熱愛していた女を捨てて、豊かな家の女を妻にし、遠国に下るのである。が、元の女が忘れられず、都に舞い戻るや、今の女を実家に追いやり、旅姿のまま元の女を尋ねると、女は恨む様子もなく「喜氣」に迎えてくれる。だが、一夜明けると、男が「搔抱」て寝ていたのは、「枯々ト干」からびて「骨ト皮」ばかりの「死人」だった、と云うのである。このようなグロテスクな結末

は、既に云われているように秋成の美意識が許さなかったから、とのみ考えることはできないだらう。何故なら、この男は、勝四郎とは違い、始めから終りまで、身勝手な男としてしか描かれていないからである。その当然の結果、この男は、屍になっている女の姿を見ても、

^{あさまし}奇異ク怖シキ事云ハム方無ケレバ、

^{いふ}弥ヨ怖シキ事無限シ。

と繰り返すばかりで、この女は、宮木のように、

恐ろしくも且なつかし。

と、男に思われることはないのである。もともと、宮木の姿は、翌日勝四郎が目覚めた時、影も形もなくなっている。が、勝四郎の場合、この男とは違い、女をつれて古里を出た訳ではない。愛に深く執着したからこそ女に生まれた、と云われ、愛の場面では特に、一途に思いつめ、裏切った男にも会わずにはおれない女にとって、他の女への心変りは、永遠に忘れられない心の傷になり、どうすることもできないその恨みは、グロテスクに「枯々ト干」からびた形でしか、現われようがないのかもしれない。

謡曲『砧』の女を見てみよう。この女も、

げにや偽りの、なき世なりせばいかばかり、人の言の葉うれしからん、おろかの心やな、おろかなりける頼みかな

と述懐するように、夫の違約を伝える人の言葉を信じて、心を乱し恨み死にする。彼女は、「自訴」の為に「三年」も「在京」する夫を待ちかねて、「都の花」への疑いは死後も消えず、「地獄の苦しみ」の中で、なおも夫を慕い、恨「んで」、「法華説誦の力」で、ようやく「成仏」するのである。何よりも自分自身への誓いを守って死ん

でいった宮木とは、大きな違いだろう。

それなら、『愛卿伝』の愛卿の場合はどうだろう。彼女は「娼妓」である。既に云われているように、この小説の翻案と云われる『伽婢子』巻六の、「藤井清六遊女宮木野を娶りし事」で、愛卿に相当する宮木野が、自害の後に姿を現わし、趙子にあたる清六に、

自ら元来宮家高門の娘にあらず、仇に儼なき流れの身となり、
(中略)君に逢ひて真の妻となり、昔の習はしを捨てて正しき道を行はんとす

と云っているように、愛卿は「娼妓」だからこそ、「人妻であることとの確証を求め」趙子には愛よりも名を選ばせ、夫の留守中、姑が病氣になると孝の限りを尽し、戦乱に巻き込まれて、身も汚されそうになると、自ら縊れて死んでゆく。そんな愛敬を、作者が男子に再生させることで報いていること、既に指摘されている通りである。また秋成がこの物語で、再生の方法や、『伽婢子』に色濃く現われる因果応報の理をとらないこと、云うまでもない。だが、ここでは、愛卿が報いられていることに、注目しておこう。

というのも、『源氏物語』蓬生の巻では、勝四郎が、荒れ果てた古里で待っていた宮木の姿を見て、

かはらで独自浅茅が原に住みつることの不思議さよ

と云ったその「浅茅が原」で、光源氏を待ちわびていた末摘花は、源氏に発見され迎えられて、その純情は十分に報いられているからである。勿論、末摘花は、宮木のように亡霊ではない。が、「浅茅が原」の宮木の魂は、死後もなお五年もの間、ひたすら勝四郎を待ち続けていた。しかも、勝四郎が現実にも再会するのは、宮木が「末期の心」を托した次の歌、

さりともと思ふ心にはかられて世にもけふまでいける命か

である。そして勿論、勝四郎はこの歌を見て、宮木の死を悟っている。だが、「烈婦」として生きようとした宮木の魂は、「雷に摧れ」た「松」が「響えて立」っていたように、勝四郎に再会する「けふ」まで、「いける命」をいだいて勝四郎を待っていたのではなからうか。改めて云うまでもなく、死んだにもかかわらず、その死を納得しないからこそ、その心のままの姿で現われるのが、幽霊と云うものだろう。宮木の魂は、生きているつもりで、勝四郎に再会しているのである。従って、宮木の心の内では、「逢を待間に恋ひ死」にしたのではなかったらう。

もっとも、勝四郎の話の一部始終を聞いた漆間の翁は、今の物がたりを聞くに、必ず烈婦の魂の来り給ひて、旧しき恨みを聞え給ふなるべし。

と云っている。彼女が亡き人であるこというまでもない。だが、今は長き恨みもはればれとなりぬる事の喜しく侍り。

と宮木の亡霊が云ったように、宮木には既に、「人しらぬ恨」などないはずである。翌朝彼女の姿が消えている所以でもある。

しかも宮木は、宮木の死を「惻し」む漆間の翁の手で、丁寧に「柩」に「蔵め」られ、「末期」の際に記した歌とともに、手厚くまつられてもいた。『今昔物語』の女のように、その屍を葬る者もなく、そのまま捨て置かれたのではない。

しかもその上、幾分長いが、漆間の翁が勝四郎に、次のように語っていることに注目してみよう。

翁が祖父の其の祖父すらも生れぬはるか往古の事よ。此の郷に真間の手児女といふいと美しき娘ありけり。家貧しければ

身には麻衣に青袴つけて、髪だも梳らず、履だも穿ずてあれど、面は望の夜の月のごと、笑は花の艶ふが如、綾錦に裹める京女隣にも勝りたれとて、この里人はもとより、京の防人等、国の隣の人までも、言をよせて恋ひ慕はざるはなかりしを、手兒女物うき事に思ひ沈みつつ、おほくの人の心に報ひすとて、此の浦回の波に身を投しことを、世の哀なる例とて、いにしへの人は歌にもよみ給ひてかたり伝へしを、翁が稚かりしときに、母のおもしろく語り給ふさへいと哀れることに聞きしを、此の亡人の心は昔の手兒女がをさなき心に幾らをかまさりて悲しかりけん。

と。『万葉集』卷九に歌われ、秋成自身も『金砂』八に触れている「勝鹿の真間の娘子」の歌をふまえたこの文章の傍点部分は、勝四郎が宮木に再会した時の宮木の姿を述べる次の部分、

いといたる黒く垢づきて、眼はおち入りたるやうに、結たる髪も背にかかりて、故の人とも思はれず

に照応し、「人の目をと」め「るばかり」に美しかった「稚」い宮木の姿が、貧しくて粗末なものを着てはいても、「京女隣にも勝り」、「月」や「花」同様に清らかで「美し」かった「往古」の真間の手兒女の姿に重って、その一途に思いつめた「をさな」いまでに純真無垢な心根が偲ばれる時、宮木に言い寄った戦乱の巷の「虎狼」のような「恐」しい「人の心」も、

いにしへの真間の手兒奈をかくばかり恋ひてしあらん真間のてごなを

と詠んで、宮木の死を悼んだ勝四郎の心と同じ次元にまで、昇華されてしまうだろう。そして勿論、勝四郎を待ちわびて、死ぬしかな

かった宮木のはかなくも哀れな姿が、永遠に勝四郎の心に住みついて、かつて宮木がそうであったように、今度は勝四郎が、命ある限り宮木を忘れないだろうこと、云うまでもない。と同時に、読者をも含め、宮木を知るすべての人の心の中にも、宮木は永遠に住みついてしまおうではなからうか。

とすると、中村幸彦先生が、この作品の題名の出典としても御指摘になられた『徒然草』百三十七段の次の部分、

男女の情けも、ひとへに逢ひ見るをばいふものかは。逢はで止みにし憂さを思ひ、あだなる契りをかこち、長き夜をひとり明かし、遠き雲井を思ひやり、浅茅が宿に昔をしのぶこそ、色好むとはいはめ。

が、重要な意味をもってくるように思われる。光源氏の心のうちに、永遠の女性が住みついていたように、勝四郎の心にも、読者である私どもの心にも、宮木というはかなくも美しい女の姿が、その死を代償に、その意志を遙かに超えて、永遠に住みつくことになるだろう。嫉妬にかられたオセロが、デスデモーナを殺害して、彼女を永遠に自分のものにしてしまった、あのイギリスの文学の場合とは、全く逆の形で。

注

(1) このことに関しては、浅野三平氏の『上田秋成の研究』（桜楓社）第三章『雨月物語』研究五「浅茅が宿」をめぐってに、手きわよく記されている。

(2) 鑑賞日本古典文学第35巻『秋成・馬琴』（角川書店）

(3) 高田衛氏は、「浮び上ってくるのは、乱世戦国という闇の時代に生きる庶民の運命である」（『有精堂刊「雨月物語評解」』と云われている。また、『映画「雨月物語」の製作者たちは、戦争がこの無辜

な純情の女性に与えた不幸を示して、戦争への抵抗としたと解釈を与えた」(『秋成・馬琴』)とも云われている。

- (4) 高田衛氏も、「七年前の享徳四年には、東国に帰るでだてがなく、此の年になって、わずか十日余の旅で故郷にたどりつく……、そこに矛盾を感じる人もいようが、重要なのは勝四郎における死生を超えた帰郷の意志なのである」(『雨月物語評解』)と云われている。

- (5) 日本古典文学全集『英草紙西山物語雨月物語春雨物語』(小学館)

- (6) 『雨月物語評解』

- (7) 『令』の戸令以来、夫が消息不明のまま、「三年」も帰らなければ、再婚してもよいと、考えられていた。

- (8) 日本古典評釈叢書『雨月物語評釈』(角川書店)

——姫路短期大学教授——